著者について

津野海太郎（つの・かいたろう）

一九三八年生まれ。早稲田大学文学部卒業。黒色テント68／71に拠って演劇運動を展開するとともに、雑誌や単行本の編集にかかわってきた。

著書『ベストと劇場』『悲劇の批判』（晶文社）『門の向うの劇場』（白水社）

小さなメディアの必要

一九八一年三月二五日発行

著者　津野海太郎

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1981 Kaitaro Tsuno

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

小さなメディアの必要

津野海太郎

晶文社

ブックデザイン　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小さなメディアの必要　目次

I

森の印刷所　11
子ども百科のつくりかた　23
雑誌のロンサム・カウボーイ　45
太い指とからっぽの部屋　56
ガリ版の話　59
本の野蛮状態のさきへ　83

II

海は人の母である　107
国立民族学カタログ館　134

Ⅲ

アジア演劇の練習　151
ふしぎな芝居を中国で見た　175
道化の解放　199
『西遊記』日記　212
演劇ぎらいの演劇　241
あとがき　257
初出一覧　260

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

森の印刷所

ウィリアム・モリスは金儲けの天才だったという説がある。そう書いたのは渡部昇一で、私たちはこの奇説に、エッセイスト・クラブ賞をえたかれの著書『腐敗の時代』のなかで接することができる。

ケルムスコット版として知られる本の装幀のみならず、壁紙や織物の天才的なデザイナーだったモリスは、同時に、イギリス労働運動の先達のひとり、イギリスで最初のマルクス主義者のひとりでもあった。この、モリスにおけるデザインと社会主義とのむすびつきが、渡部にはことのほか不愉快だったようだ。これでは安心して、自分の書斎を美しいモリス・プリントでかざることすらできないではないか。かれの「知的生活」にとって、モリスをもっと消化しやすいものにしておかなくてはならない。そのための「方法」が、モリスを金儲けの天才にしたてあげること

だった。

モリスの家具や壁紙はよく売れた。それはかれが「自分の店」をもち、製品の質を高度にたもつことができたからだ。すなわち、かれの仕事をささえたのはほかならぬ資本主義の経済体制だった。したがって「生活に芸術的な質の高い手造り品を入れたいならば、社会主義に抵抗して、私有権の神聖を尊重しなければならない」——しかるに、見てはならない夢を見てしまったモリスには、この簡単な理屈が見ぬけなかった。当然の結果として、かれは社会主義的な労働運動に手ひどく裏切られる。

「革命の実践団体から退いたモリスは何をやったか、と言えば、彼は自分の『出発点』に帰ったのである。そして手造りに近い美麗な本を作り出すことに夢中になった。モリスは十五世紀の印刷術を復興することを意図したのである。これが有名なケルムスコット版の誕生であった」。

このモリス像を批判するのは、本来であれば私などではなく、中公新書で『ウィリアム・モリス』を書いた小野二郎の役目である。

製品の質をたもつのは、それを獲得し、まもる、職人たちの自由な連合の質である。小野二郎によれば、モリスはそのように考えて、かれらの「店」をつくった。「戦いのための組織がそのまま生産のための組織になる」——資本主義がこうした連合をぶちこわしつづける体制であることは、いうまでもない。しかし社会主義を名のって、こうした連合の質をぶちこわす体制があるとすれば、それも本当の社会主義とはいえない。一八九〇年、かれはたしかに社会主義同盟をと

1894年のメーデー集会におけるモリス。ロンドンのハイド・パークにおけるウォルター・クレインのスケッチ。

びだし、ケルムスコット・プレス（印刷所）を設立した。だが、それと並行して、渡部は見て見ないふりをしてしまったが、モリスは自分の考える社会主義運動の拠点として、あらたにハマスミス社会主義協会を設立しているのである。かれは「革命へむけての教育」という主張をてこに街頭集会に参加し、協会の集会所で日曜講義や芸術の夕べをひらいて、自作の劇に出演した。『ユートピア便り』を書きはじめたのも同じ一八九〇年だった。

「モリスは運動そのものから失意のうちに引退したわけではなかった。一八九八年の死に至るまで、かつてほどの頻度はないにしても、その運動はつづいたし、少なくなったのも九一年来の健康のいちじるしい悪化のせいであって、運動に対して興味を失ったり幻滅したりしたからではない」。

晩年の数年間にかぎっても、渡部昇一のモリスと小野二郎のモリスとは正反対の顔だちをしている。両者のちがいには調整の余地がない。これは私の推測だが、渡部は「ラディカル・デザインの思想」と副題された小野の本を読んで、それにたいする一種のあてこすりとして、かれのモリス論を書いたのではあるまいか。「急進的な思想を抱いたデザイナーという言葉から連想されるようなものはモリスには全然なかった」と渡部はいいつのる。大胆なひとだ。これに反論するのはやはり小野の役目であろう。

渡部昇一はかれの買いとりマンションにおける「知的生活」の安定と充実のために、モリスの壁紙をモリスの社会主義ぬきで所有する「方法」をあみだし、それをかれの読者に披露すること

ができた。読者諸君の私有意識をくすぐり、見てはならない夢からかれらをひきはなしておくために、にせのモリス像をでっちあげた。このモリスは抽象的な空間のなかに不意にあらわれたのではない。それは一九七〇年代なかばの日本という具体的な状況のなかで、もうひとつのモリスを否定し、せせらわらい、時代おくれのものとするために、ほとんどそのことのためだけにもちだされたのである。天下の大勢は自分に有利だ。いまならどんなきたない手口もゆるされる。かれはそう思っていたにちがいない。

*

書店にゆく。おおくのばあい、入口のすぐかたわらに読書コーナーがもうけられている。読書案内、読書法、書物随筆といった種類の本が、めだっておおくなった。こうした「本についての本」の洪水からまっさきにきこえてくるのは、本について意識過剰にならざるをえなくなった出版関係者の悲鳴のようなものである。そこには私自身の悲鳴もまじっている。本が売れない本屋は、本ではなく、本のイメージを売る。本を読むこと、本を買うこと、本を所有することが、いかに充実した行為であるかという雰囲気を売る。はじめから雰囲気以外のなにものでもない「知的生活」を売る。その結果として、本にたいする時節はずれのフェティシズムが増大する。

渡部昇一の『知的生活の方法』は、講談社現代新書から一九七六年に出版された。それは一見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com